

社乃杜

秩父神社社報
社乃杜(ははそのもり)

第 34 号

平成18年12月3日
(大 祭)



奉祝 悠仁親王殿下御誕生

冬日平

神のみの國

のもの

猿田成久人命造

伊勢の式年遷宮——その意味すること

あと七年後に迫つた神宮の式年遷宮——よく「皇家第一の重儀」と称されます。はるか遠く白鳳時代の持統天皇四年（西暦六九〇）に始まつた二十年に一度の大事業、実に一千三百余年のあいだ連綿と続いて、今度は平成二十五年に第六十二回を迎えます。

皇室のご神祖で太陽の恵みを体現された日の大神をお祀りする天照皇大神宮を「内宮」、太陽の恵みを地上に活かして海・山・里の幸を受け給う豊受大神宮を「外宮」と申し上げ、ほかに十四の別宮など全部で大小百二十五社をまとめて伊勢の「神宮」と称します。

桧の素木造り掘立て柱で萱葺き屋根、切妻造り平入り高床式の神宮社殿は、古代の稻倉さながらに、まことに簡素ながら清楚で莊嚴な「唯一神明造」という世界に誇る建築です。

これを古代の技法さながら忠実に再現することは、現代では却つて至難の事業なのです。

それでも敢えて、現代に古代を生かすこと——そこには何の意義があるのか。

現代の極度に人工的な物質文明のなかで、あらためて太陽や自然の恵みを神々の御業とみなし、神・人とともに生命の息吹を遷宮とともに新たにする——

そこにこそ現代に重い意味があるのです。

解説 秩父神社(33)

八意思兼神のご縁

秩父神社権禰宜 甲田 豊治



養命酒の商標「飛龍」

去る九月十九日・二十日に、神社 庁秩父支部主催による研修旅行が実施され、信州は安曇野に鎮座する穗高神社、また長野県南部に位置し阿智村は昼神温泉郷に鎮座する阿智神社、そして全国におよそ一万社勧請されている諏訪大社上社本宮の参拝旅行に、私も同行させて頂いた。

本題にはいる前に、今回の研修旅行の中で大変興味深い事が目についた。この「飛龍」実は当社

テレビCMでもおなじみの養命酒製造株の駒ヶ根工場見学の際、玄関の正面に「飛龍」を施した甕が目に付いた。この「飛龍」実は当社の象徴である飛龍。そして家康公寄進による当社社殿を火の難から守り続ける水を司る飛龍の彫刻。双方とも水の存在から悪疫退散の繋がりが感じられ、また家康公という偶然か必然か双方に縁ある人物の繋がりもまた不思議でならない。

八意思兼神 呉表春命 次 武藏秩父国造等祖
と記されているように、御祭神として八意思兼神をお祀りしている

殿の東西に彫刻され、「水」を司ると伝わっている。養命酒製造株の広報に伺つたところ、慶長7年(1602)に塩沢宗閑翁によつて創製され、その翌年(1603)江戸に幕府ができ徳川家康公に献上したところ、「天下御免万病養命酒」と免許され、その象徴として「飛龍」を目印として使用を許され、日本における最も古い商標の一つだと伝わつてゐるそうだ。

体調を整え改善し健康を維持させる養命酒はやはり水が命、その象徴である飛龍。そして家康公寄進による当社社殿を火の難から守り続ける水を司る飛龍の彫刻。双方とも水の存在から悪疫退散の繋がりが感じられ、また家康公という偶然か必然か双方に縁ある人物の繋がりもまた不思議でならない。

八意思兼神 呉表春命 次 武藏秩父国造等祖
と記されているように、御祭神として八意思兼神をお祀りしている

殿の東西に彫刻され、「水」を司るといふが、阿智神社では、写真の掛け軸に伝わるように、八意思兼神が糀粒を単位として長さの基準を定めた曲尺を考案し、これを使い高天原の宮殿を建てたことから、家屋上棟の神として祀られ、建築土木の守護神として広く崇敬を集めている。

阿智神社の参拝は行程の都合から早朝で尚且つ希望者のみとなり、研修参加者の中でも特に建築関係者が多く参拝し、曲尺のお守りを知人の建築関係者にと記念に求めていく方が大勢いた。「建築土木」の御神徳からすると、当社社殿においても当時の名工が携わった見事な彫刻群。さらに秩父郡市内に拡がる屋台・笠鉾の建築技術などから見ても、匠の技が伝えられているこの秩父の里は、やはり八意思兼神のご神徳が脈々と受け継がれているよう感じならないのがれどある。



阿智神社

神仏という宗教文化 —生命畏教の伝統—

宮 司 蘭 田 稔

一 文化的宗教と文明の宗教と

キリスト教やイスラム教に代表されるように、その宗教を信仰する人々によつて教団が組織され、その信仰の下に共同体が形成されるというような類型を、私は「宗教の共同体」と呼んでいます。それとは別に、こうした教団的な宗教が出現する前の、人間が生きるための共同体社会が、家族や部族を単位としてつくられ、共同生活が営まれるという段階で、死者の弔いや誕生の祝いなどを通じて宗教的な営みが行われるわけであり、小さな共同体であつても、宗教性は当然もつてゐるわけです。こういう宗教文化のあり方を、私は「共同体の宗教」という言葉で表現しています。

この二つは非常に対照的な類型になると思います。現在では、キリスト教やイスラム教のような宗教のあり方が当然のようと考えられていましたが、これは実は都市文明の中で登場してきた宗教の新しい形であると言えるのです。文明ですから普遍性をもつた教えであり、ひとつの民族の中でも完結するようなものではありません。人間としてとか個人として、というような教えでもつてでき上がつてゐる特別な宗教の世界であり、一般社会の中からは独立した存在となるわけです。

しかし、日本の宗教のあり様を考えると、ある意味、日本化した仏教と神道とが共存した神仏の宗教文化だと言つても過言ではありません。その一千年以上にわたる長い歴史は、むしろ共同体単位の宗教として定着してこそ、いわゆる神仏習合なり神仏共存の伝統が日本人の中では常まれてきました。今日のように、まず教団あつての宗教という考え方では、日本の宗教文化を捉えることはできません。具体的には、家族や同族、あるいは一族という単位がそのままひとつのか共同体を成したわけで、そ

れが繁栄するようにと神仏の加護を求め、村落共同体であるムラを単位として、氏神とか氏寺というように、神社も寺院も必ず共同体の中に當まるという形であり、決して「個人の信仰」というレベルではありませんでした。

つまりムラやイエスが宗教的な担い手となつて、選択的に神道や仏教のある部分を取り入れるというのが基本的な姿勢だつたのです。だからこそ、神であろうと仏であろうと、自分たちの生活のリズムの中に取り込むことができたのです。それが明治以降の近代化の中で宗教という観念が専らヨーロッパの近代宗教観からくる「個人の信仰」に基くものであるという考え方方が、学問的にも宗教を捉える見方として導入され、その結果、様々な混乱が生じることとなり今に至つているのです。

二 神仏の生命的世界

今日、最も憂うべき問題のひとつは、日本人が本来もつていた「命の大切さ」という精神を失つたことではないかと思います。元来、日本人は人間だけでなく、すべての生き物と生を共にし、命を大切にするという気持ちをずっと持ち続けてきました。それが物質的な富の追求の中で、生きている人間だけが生きる権利があるかのよう、非常に浅い生命觀をもつようになつてしまつたのです。よく考えれば、親から子へ子から孫へと伝えられてこそその命であつて、自分だけの命というものはないはずです。しかし、戦後の徹底した個人主義によって、命は自分だけのものと考えるようになりました。ですから動植物の命を考えることもしなければ、他人の命や親子の間での命のことすら考えられなくなり、連日のように悲惨な凶悪事件が後を絶たないようになります。

神社の祭りにしても、自分たちの命といふものは目に見えない先祖や神々から戴いているということがまずあつて、

世界伝統宗教指導者会議



めの観光産業的な意味が強調されて本来の意味を失いかけています。

秩父盆地に配置された三十四ヶ所の觀音靈場に代表されるように、秩父の豊かな風土に納められた仏の世界と、秩父の豊かな風水に鎮まる神々の恵みを祈り、そして感謝するという意味での神々の世界は、二つながらひとつであると私は考へています。

明治以降に急速に広まつた近代化という考え方には、物事を仕分けして理解するという分析的な営みが基本的な性格としてあります。明治の神分離というのも、二つながら融合していたのを分けるという発想が基本的になりました。こうした分析的な考え方があまりにも近代を支配し、その結果、全体として命を見るという見方が疎かにされてきたよう思います。

三 現代人の課題

今日、「自己の確立」とか「主体性の確立」ということが頻りに言われます。これは大事なことなのですが、忘れてはならないのが、日本人は全体の中の一員として自分があるという発想を元来もつていたということです。「自分」とは、そもそも全体における己の分け前という意味です。この二つのバランスをもつて、むしろ主体性を考え、自己の確立を考える場合でも、必ず共同体の中での自分ということを忘れてはいけないということです。哲学者の和辻哲郎は、「人は人と人との間柄である」ということを述べています。だから「人間（ニンゲン）」なのだと、いう彼一流の倫理学です。これは非常に大事なことを示唆しています。確かに近代的な意味での自我の確立は大事ですが、それは決して個我ではありません。極端な個人主義の傾向が強まる現代にあって、全体の中の自分という発想は極めて重要な意味をもつっています。

近代以降の人間中心主義の考え方により、人間は如何に豊かになるかということをずっと追求してきました。その結果、他の命への配慮を欠き、人間の仕業による深刻な環境破壊が危ぶまれるに至りました。日本佛教では山川草木悉有仮性と言つて、一木一草に至るまで悉く命がある



第2回 カザフスタン世

産み、次の命を育ててゆくということが本来の姿であり、これを靈的に捉えて、個の命を超えるという発想が非常に大切なのです。

(NHKラジオ第二放送「宗教の時間」より抜粋)

【表紙俳句解説】 冬北斗 秩父の国は 神のもの

この度の表紙俳句は、秩父・長瀬は寶登山神社名譽宮司横田茂様の遺句文集『寶登』より掲載させて頂きました。

横田茂様は、大正四年三月三十一日秩父町に出生。昭和十二年國學院高等師範部卒業。昭和二十年県社寶登山神社社司拝命、翌年法令改廃により同社宮司。昭和五十一年埼玉県神社府長、神道政治連盟埼玉県本部長就任。昭和六十一年神職身分特級、神社本廳理事。平成元年埼玉県神社庁顧問。平成六年神社本廳より「長老」の敬称と鳩杖を賜う。平成十四年寶登山神社名譽宮司。平成十六年十一月三日逝去。享年九十歳。

【表紙解説】

この度の表紙俳句は、社報柞乃杜第33号に統いて、淺見嘉正先生の作品『雪の神苑』を掲載させて頂きました。雪化粧された神社下境内の水舍の手前から望む神門と御社殿を画かれ、参道の石畳また馬舎と藤棚そして平成殿の軒が一段と奥行きの遠近感をかもし出した作品となっています。

平成十八年二月七日、秩父地方にはじめての積雪を観測した日。淺見先生は、前の晩から降り出した雪が明け方には止んでしまい、空模様もどんよりとした曇り空であることから、雪のスケッチを諦めかけていた時のこと、にわかに東の空が明るくなり始めたため、「今だ」と身支度を整え、神社の境内に急いでかけつけ写生にとりかかったそうです。

前回の作品同様に、「神苑での写生は大変な『パワー』と氣を引き締める決心をして執りかからなければいけません。さらに、雪の風景の神苑を画くときは、神々しさも増すことから一層精進して画かなければ・・・」との感想を頂きました。

と言っています。これは単に「生きている」というだけではなく、命を靈的に捉えることを意味しています。今日の分析的な視点では、命には「生理的な命」と「心理的な命」の二つしか考へていません。しかし、命というものは個的な命を超えて繋がりの中で次の命を

命には個的な命を超えて繋がりの中で次の命を捉えていません。しかし、命というものは個的な命を超えて繋がりの中で次の命を

奉祝 悠仁親王殿下御誕生

秋篠宮殿下の第三子となる親王様が九月六日に御誕生になり、お七夜にあたる十二日には「命名の儀」が行われ、お名前を「悠仁」(ひさひと)、お印が「高野槇」と決まり、当社におきましても中祭式により親王殿下御誕生奉告祭を斎行致しました。

だんじり祭視察と 京都・松尾大社参拝

氏子青年会幹事長 手島 孝

九月十五日～十七日、大阪岸和田だんじり祭視察と京都・松尾大社正式参拝研修旅行に丸岡会長以下総勢二十五名で行つて参りました。氏子青年会としては、平成五年以来勇壮な祭でも特番が組まれ、又、毎年テレビで放送されることが多く、この日は前日出も過去最高でした。



だんじり祭といえども、だんじり祭視察と京都・松尾大社正式参拝研修旅行に丸岡会長以下総勢二十五名で行つて参りました。氏子青年会としては、平成五年以来勇壮な祭でも特番が組まれ、又、毎年テレビで放送されることが多く、この日は前日出も過去最高でした。



松尾大社

だんじりの屋根の上でリズミカルに团扇を持つて踊りながら方向を指示する「大工方」は花形で秩父で言え巴(はやし)といつたところでしょうか。若者男女(そぞうじん)と一緒に駅前で全てのだんじりと各町内のパフォーマンスも見学出来、岸

が結果はかろうじて樽の縁をかすめたのみでした。その後一行は嵐山へ向かい、世界遺産の天龍寺を見学し、精進料理をいただきました。この研修の締めくくりに菌田建権(きんでんけんせん)のはからいで「源氏物語 花の庭」で有名な城南宮を拝観しました。

城南宮は秩父の中町屋台とも縁があるとのお話も伺い大変驚きました。一泊三日のハードスケジュールでありましたが、秩父神社宮司様のご配慮をはじめ、今回同行した岩田(いわた)・蘭田(らんた)両権(ごん)補(ほ)宜(よし)、幹事の皆さん企画により、無事に心に残る楽しく有意義な研修旅行が出来ました。本当にありがとうございました。



城南宮

す。宜しくお願ひ申し上げま

た。地域の方々や参拝者にとって、秩父神社が心の拠り所となるよう、素直な心・謙虚な心・感謝の心・奉仕の心を大切にし、一所懸命に神明奉仕に勤しみ励みたいと思いますので、どうかご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひ申し上げま

た。地域の方々や参拝者にとって、秩父神社が心の拠り所となるよう、素直な心・謙虚な心・感謝の心・奉仕の心を大切にし、一所懸命に神明奉仕に勤しみ励みたいと思いますので、どうかご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひ申し上げま



巫女見習 近藤 祝子

昭和五十九年
二月三日生れ
在住
小鹿野町飯田
皇學館大學文
學部神道文
卒業

◆新人紹介

◆秩父神社 神楽師新人紹介



この度、秩父神社付属神樂の神楽師に新しい仲間が入りましたので紹介致します。飯能市刈生在住で現在飯能高等学校二年生の石森裕也君です。石森君は、当社で開催される雅楽講習会に参加の折、神樂にも興味を持ちはじめ、縁あってこの度、秩父神社として奉仕することになりました。現在では、神楽笛や舞などメキメキ上達しております。

今までには、神楽笛や舞などメキメキ上達しておられます。今までは、神楽笛や舞などメキメキ上達しておられます。



◆絵画奉納報告

この度の表紙絵画にも、掲載させて戴きました淺見嘉正先生から、絵画の奉納がございましたのでご報告致します。

- | | |
|-------------|----------------|
| 九月九日 中村講 | 高橋信一郎講元外三百六十五名 |
| 九月十六日 荒川妙見講 | 出浦義雄講元外百十二名 |
| 九月十七日 上町講 | 浅海忠講元外七十七名 |
| 九月三十日 上宮地講 | 松本真一講元外二百二十四名 |

◆絵画奉納報告

この度の表紙絵画にも、掲載させて戴きました浅見嘉正先生から、絵画の奉納がございましたのでご報告致します。

- | | |
|--------------|--------------|
| 十月二十六日 東町妙見講 | 今井奎吾講元外二百三名 |
| 十一月十日 番場講 | 宮野前方也講元外百一名 |
| 十一月十七日 野坂講 | 新井永保講元外百九十八名 |

◆柞乃杜神前結婚式報告

この偉業を称えて、日本医史学会、日本産科婦人科学会、埼玉県医師会が主催し、帝王切開手術日より百三十五年目にあたる昭和六十二年六月十二日に国道299号線に面した本橋家入口に「本邦帝王切開術発祥之地」の石碑が建てられました。

この偉業を称えて、日本医史学会、日本産科婦人科学会、埼玉県医師会が主催し、帝王切開手術日より百三十五年目にあたる昭和六十二年六月十二日に国道299号線に面した本橋家入口に「本邦帝王切開術発祥之地」の石碑が建てられました。



◆秩父神社妙見講

梟だより



自 平成十八年九月
至 平成十八年十一月

小菅健夫講元外百三十七名

◆職員辞令

近藤 祝子 巫女見習を命ず
(十一月一日付)

郷土の偉人 伊古田 純道 江戸末期の嘉永五年（一八五二年）四月二十五日（新暦六月十一日）正丸峯の山裾、秩父郡坂元村（現飯能市坂元）に住む本橋家において我が国初の帝王切開手術が行われました。お産は難産で、初めては地元の医師岡部均平が処置を施しましたが分娩せず、秩父郡大宮郷の医師伊古田純道が駆けつけ、苦しむ妊婦の命を救うため、オランダ産医書の翻訳「撒羅満氏産論（さらまんじさんろん）」を頼りに致命率の高かつた帝王切開を麻醉なしで奇跡的に成功させました。二人は比企郡番匠村（ときがわ町）の如達

堂という医学塾で学んだと伝えられ、この手術の様子は伊古田純道によって「子宮切開術実記」に残されています。



◆ 海外の活動を終えて

宮司 蘭田 稔



カザフスタン伊藤大使表敬訪問



カザフスタン平和祈願遙拝式を終えた
神社本廳久邇統理と記念撮影

年次総会に参加する活動団体との
世界の非政府組織と
カザフスタン平和祈願遙拝式を終えた
神社本廳久邇統理と記念撮影

いつものことですが、今年の夏も
社頭を離れ国内外に東西走り日々を
どうやら無事で過ごすことができ



カザフスタン伊藤大使表敬訪問